

## 〈特集〉

EICA 未来プロジェクトからサステナビリティの  
実現に向けて

漆 原 隆 浩

東京都港湾局 東京港管理事務所

(〒108-0075 東京都港区港南3-9-56 E-mail: Takahiro\_Urushibara@member.metro.tokyo.jp)

## 概 要

理系出身者は、社会基盤を支える寡黙な従事者のままで終わるのだろうか？気候変動やエネルギー問題など社会的課題に対しやる気やアイデアを持ちながら誰かにチャンスを与えられるまで指をくわえて待っている存在でいいのだろうか？行政技術者としてそのような存在であった筆者が、人生の転機を迎えたのは未来プロジェクトに参加したことからだった。サステナビリティと多次元ネットワークという概念は斬新で魅力的だった。未来プロジェクトで得た経験を元に、サステナビリティの実現に向けて自らプラットフォームを立ち上げ活動するとともに、2012年にリオで行われる地球サミットにも活動の枠を広げた。未来プロジェクトに参加したことが起点となって環境技術から未来社会の創造まで挑戦をつづけている。

キーワード：EICA 未来プロジェクト，サステナビリティ，多次元ネットワーク，地球サミット，MSP

原稿受付 2011.5.10

EICA: 16(1) 29-31

## 1. 未来プロジェクトへの思い

## 1.1 中堅の技術者の悩み

私が未来プロジェクトⅡに参加したのは、社会人14年目で、その頃は技術だけでなく、組織運営も任せられるようになり自信を持ち始めていた頃だった。その一方で自分の力量ではできないような気候変動の問題や行政組織の課題など社会的な問題などにどうしたらよいのかとモヤモヤした感情を抱いていた。

突然、上司から有望な若手職員を未来プロジェクトに送り込むタスクを与えられた。しかし、そのタスクが遂行できなかったため、参加費は自己負担で私自身が参加することとなった。実は応募チラシを見た瞬間、自分こそが行きたいと思っていたので、費用負担は当然自分への投資だと考えた。

## 1.2 未来プロジェクトⅡへ参加

参加した未来プロジェクトⅡは、関東地区で初めての開催となるものだった。参加メンバーは企業が多かったが、大学・研究所、行政からの参加もあった。第一回のプログラムは、当時(株)明電舎副社長の後藤顕之輔氏「若手技術者、研究者への期待」と東京大学味埜俊先生「『Sustainability』の意味について考える」であった。もし参加の意義を感じなければ次回から辞退も考えていたが、講義を聞いてこれからのプログラムが楽しみになったほどだった。当時、活性汚泥モデルを用いて最適な送風を行い省エネルギーと水質向上

ができないかと考えていたため、味埜先生の講義を楽しむにしていたがそれはいい意味で期待を裏切った。サステナビリティの概念を理解し、俯瞰的な視点から見ることで社会的課題を解法が見えるのではないかと思えたとし、将来大きな武器になると確信できたためである。

講義後にディスカッションがあったがこれもいい勉強になった。全く知らない人たちと意見交換しグループの考えを発表する。まさにこれは他流試合で真の自分の価値や力が試される貴重な場であった。

## 1.3 異業種交流による新たな人間関係の構築

未来プロジェクトⅡでは、メンバーとの交流ができたことがよかった。メンバーはこれからを担う有望な人材が集まっていて意識が高く、仕事だけでなく各々の思いを語りあった。特に伊豆高原で宿泊のプログラムは交流が促進された。その中で、企業のメンバーから「東京都が先導して技術を切り開かないとだめだ。」と指摘を受けたのが今も印象に残っている。自分が所属する組織を外部の人ほどどのように見ているのか？また、業界における自分の役割は何なのかを自覚した。今もそのことが新技術開拓への原動力となっている。

## 1.4 研究発表会に向けて

4回に渡るプログラムが終了し、最後にこれからどうするか参加者で議論した。学んだこと・考えたこと

を EICA の研究発表会で発表するか、しないか。するのだったらどのようなグループでどのようなテーマでやるのか？プログラム全体を指導いただいていた味塾先生が参加者全員から意見を引き出し合意の元に発表することとなった。多様な意見を持っている人達をまとめ上げるファシリテーションが本当に素晴らしいと思った。

発表が決まった後、研究発表会で何を発表するのか？それを 5,6 名のグループ内で合意形成が難航した。発表のベースは何もなく、全員が仕事や研究をもって十分に時間がかけられなかったからである。試行錯誤の中、他人の考えを聞き、自分の考えを説明するという対話形式が自然と行われた。また普段全員と会えないので、その際に有効だったのがグループツールの活用だった。

### 1.5 未来プロⅡ終了～コーディネーターとして

研究発表会が終わると有志で次のステップを考えた。私も含めてこの貴重な経験や場をこれで終りにしたくなかったためではないだろうか。そうしているうちに、自分のキャリアの起点になる出来事が起こった。有志で参加したシンポジウムで「成長の限界」の著書の人であるデニス・メドウズ氏の講義を聞いた。それに影響を受けて、知識を貯めこむだけでなく社会にアクションを起こそうと熱く語り合い自分になにができるかを考えた。

結論として私は、締切り間際だった下水道新聞の懸賞論文を書くことにした。寝る時間を割いて思いの丈を書き込んだ。その後新聞社から特選受賞の連絡があった。その勢いによって組織や社会の仕組みを知りたくなった。仕事でも組織運営の業務を行っていたこともあるが、組織や社会を動かしサステナビリティを実現するためには、自然科学だけでなく社会科学の分野を学ぶ必要性を感じていたのだ。

それと同時に、未来プロジェクトⅢ以降のコーディネーターをすることになった。このことは、後のプロボノ的な社会活動の基礎になり非常に良い経験となった。プログラムの企画、講師との連絡調整、セミナーの進行運営など多くのノウハウを学ぶことができた。学会の仕事ということから講師として呼び出す著名な方々とコンタクトが取りやすく、何度か調整で連絡することで顔を覚えてもらうこと、などコミュニケーションもでき私の財産となった。

## 2. 未来プロジェクトから社会活動へ

### 2.1 持続可能な社会へのプラットフォーム形成

持続可能な社会を考え実現に向けて活動するため TokyoThinkSustainability (T2S) というプラット

フォームを立ち上げた。当初、未来プロジェクトのノウハウを活かしセミナーなどを実施した。内容は、環境や資源だけでなく経営、経済、社会の多様性など広範囲である。最初はサステナビリティという概念の理解に重点を置き、その後組織・社会変革、対話型講義へとシフトさせた。また、学び考えたものをアウトプットし、持続可能な社会への向けたリーダーを育てるため、プロジェクトを実施している。(Fig. 1) プロジェクトリーダーの中にはプロジェクトで得られた経験やサステナビリティのエッセンスを職務に反映するものも出てきた。なお、プロジェクトに関してはブリティッシュ・カウンシルなどと連携しプロボノとして活動が出来る範囲で行っている。

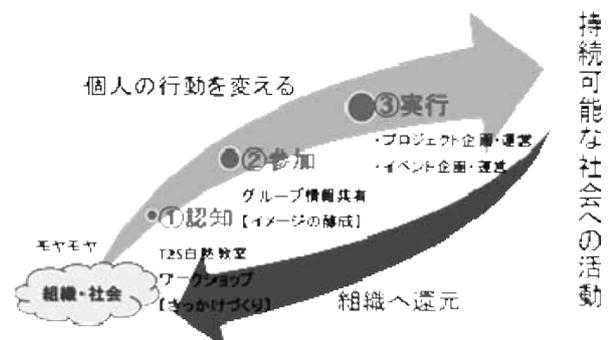


Fig. 1 組織人・社会人を持続可能な社会の変革者へ

### 2.2 地球サミット 2012 に向けた活動

サステナビリティの実現に向けた活動を行っていく中で WorldShift などと同様な活動をしている様々な方々とコネクションができた。その一つとして、2012年にリオで行われる地球サミットを国連や政府という公的機関だけではなく、市民活動で参加できないかという試みを行っている。金融庁の佐藤氏らとともに地球サミット 2012 Japan を立上げマルチステークホルダー・プロセス (MSP) や持続可能な未来に向けたダイアログ、アクションを行っている。プロボノ活動によって社会にどこまで変えられるかの挑戦である。

## 3. 理系の発想で未来社会を創ろう

震災以降のエネルギー政策や防災に対するまちづくりなど理系的な政策がさかんに議論されている。社会のサステナビリティを実現するためには、MSP などによって政策を決めていく手法が注目されているが、このような状況を見ると、今までの文系主導から文理融合の社会的リーダーが求められている。

社会的リーダーは、既存組織にとらわれない。未来プロジェクトや学術団体、プロボノ活動による団体も

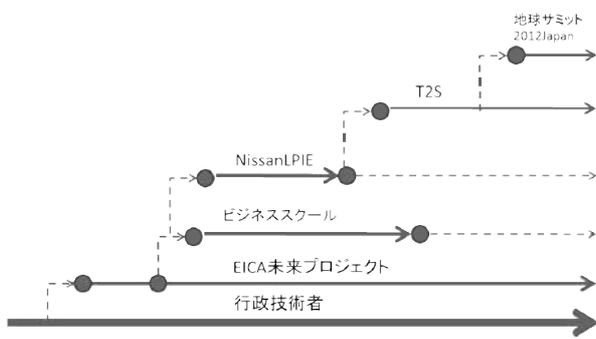


Fig.2 未来プロジェクトから連鎖したマルチなキャリア

ステークホルダーである。既存組織を飛び出し、誰しもが希望ある未来に向けて行動できる時代が来ている。

[参考文献]

- 1) 佐藤正弘：新時代のマルチステークホルダー・プロセスとソーシャル・イノベーション，政策・経営研究，Vol.3, pp. 109-132 (2010)